

■ レンゲショウマ

Anemonopsis macrophylla

(平成19年9月7日指定)

徳島県における指定状況：絶滅危惧Ⅰ類
環境省における指定状況：該当無し
その他の指定：該当なし

種の概略

1) 特徴

山地の樹林下に生える多年生草本。茎は直立して、草丈は40-60cmほどになる。葉は根生葉と茎葉があり、ともに葉柄があって互生し、2回3出、3回3出、4回3出などの複葉で、小葉は卵形をしている。先端は鋭尖形でふちには粗い不規則な鋸歯がある。茎葉は上部ほど小形になる。夏季に茎の上部に長い花枝を分枝し、上部はまばらな総状花序となって径3.5cmほどの淡紫色の花をやや下向きにつける。がく片は多数あり、楕円形または長楕円形で長さ約1.5cm、花弁も多数で倒卵状長楕円形、長さは1.2cmぐらい、基部には蜜槽がある。雄しべも多数で花弁より短い。雌しべは少数で立っていて、子房には長い花柱がある。袋果は24個、長さは1.5cm程度で、先端は長くちばしとなる。中には種子が多数ある。

和名の由来は、葉がショウマに似て、花がハスのようであることによる。

2) 生育環境

山中の落葉広葉樹林下に生育する。県内では山地の落葉広葉樹林帯の草地に生育している。

3) 繁殖生態

種子によって繁殖する。

4) 分布

日本の特産種の一つで、本州（福島県から奈良県）、四国（徳島県）に生育する。

県内の生育地は一カ所で、日本の分布の南限と見られる。

生育地と生育状況

生育地：那賀郡那賀町・美馬市木屋平

本県の自生地は那賀町と木屋平の境の山地で、狭い草地にわずかに生育している。発見当初は多く生育していたらしいが、ほとんどが栽培用に採取され、現在は幼植物



レンゲショウマ

が数個体生育しているにすぎない。

絶滅要因

1) 生育地の消失・分断

1985(昭和60)年に剣山スーパー林道が開通し、登山客が急激に増加した。登山道が生育地を通っているため、人の踏圧により自生地は荒廃した。

2) 生育地の質的劣化

生育地は民有地で、昭和40年代の森林伐採により生育環境は急激に悪化した。またスーパー林道の開通により、登山客の増加で、生育地が踏み荒らされたり、採取されたりして生育環境がさらに悪化した。そこで、登山道を、自生地を迂回するルートに変更するなどの工夫をしているが、劣化を防ぐ効果は十分ではない。

3) 過剰な採取

県内では希少な植物であるため、観賞用の栽培目的で大部分が採取されて絶滅寸前になっている。

4) 商業取引等

花が美しいので山野草店や通信販売などの商業取引の対象にもなっていて、栽培も比較的容易である。

5) 里山等の管理

生育地の周辺は伐採後に成立した二次林で、生育場所

は山頂に近く、基盤岩の一部が露出している草原である。

6) 在来種による圧迫

近年はニホンジカの食害が急増し、絶滅の危険度は一層高まっている。さらに、生育個体が幼植物であるため、他の草本類の被圧を受けて消滅する可能性がある。

保全対策

防護柵の設置と移植の試み

残存するわずかな個体をニホンジカの食害や採取による被害から守るために、地域のボランティアが中心となって生育地を有刺鉄線で囲った。

防護フェンスの設置後に、地元の有志が自生地から種子を採取し、育てていた苗を植え戻す活動を行ったが、再び柵内に侵入され、盗掘されたとのことである。

簡易な防護柵では効果がないので、2007年に県は町や地域のボランティアと協力して、より頑丈な金網の防護柵を設置した。さらに、県の任命した巡視員の定期的な巡視の効果もあり、ニホンジカの食害と人による採取は

今のところ防止されている。

保護・保全のためには、現在の自生地の現状と個体数の把握に努め、現存する個体がある場合には、それらを保護することで復元が期待できる。それができない場合には、自生地起源の栽培株の増殖によって復元を図ることも選択肢の一つである。この場合、他地域のものとの混入による遺伝子汚染がおこらないように十分な配慮が必要である。

近年、自生地にはレンゲショウマの生育はほとんど確認できない状態になっていた。しかし、2008年に生育個体を把握するため、柵外から観察したところ、最近芽生えたと思われる幼植物がフェンス際に数個体確認された。そこで、これらの幼植物を保護することで復元を図りたいと考えている。生育地は草地であることから幼植物が他の植物に被圧されない程度に、周りの草本類の繁茂の抑制に努めながら今後の生育状況を見守るべきである。

(木下 覺)



保護ネット設置状況